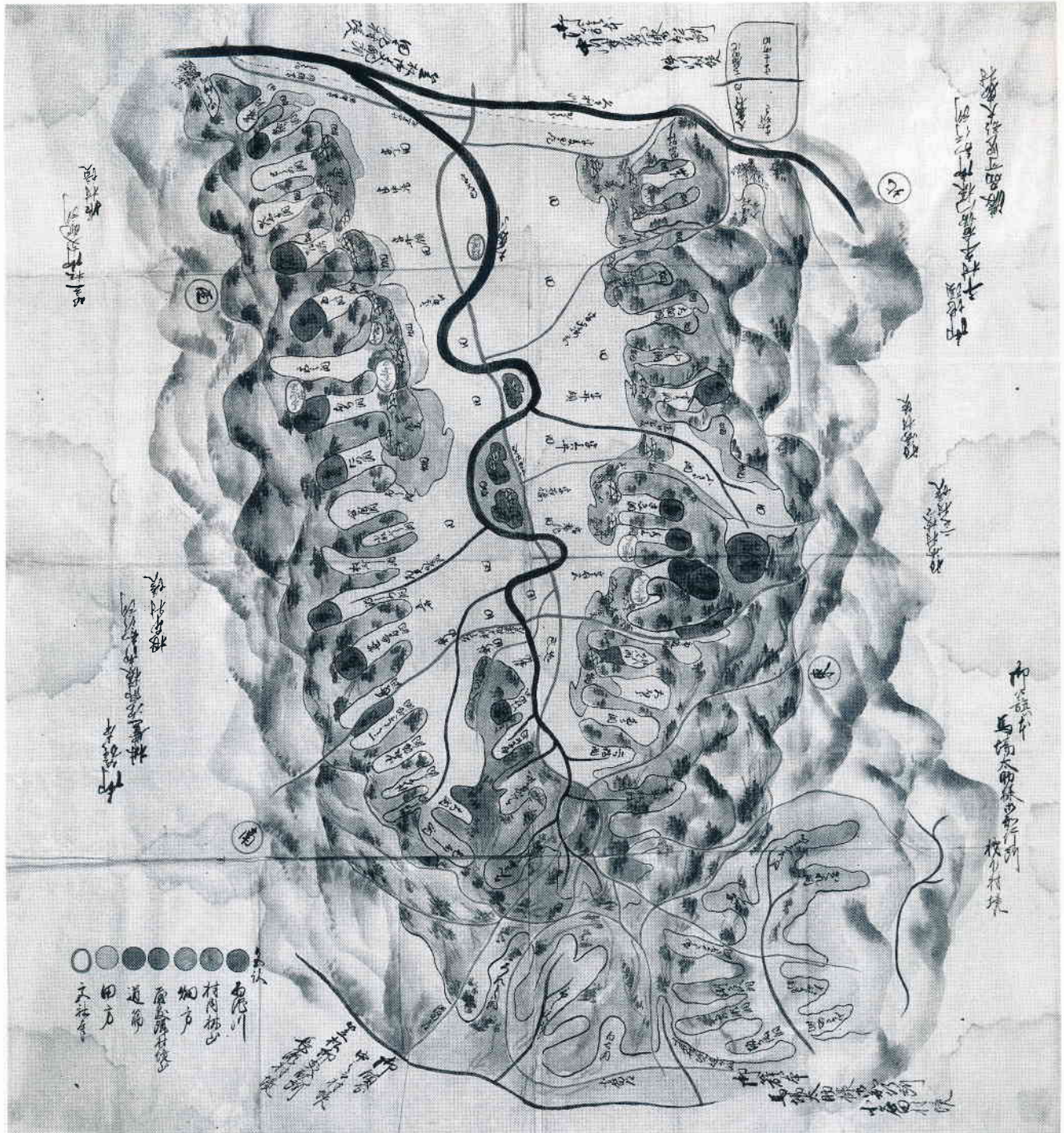


可児郷土歴史館だより

No. 12
1996.3.1

発行
可児郷土歴史館



大森村 村絵図

地図が描かれた年代は不明であるが、大森村（現在の可児市大森地区）の様子を鳥瞰図的に分かりやすく描いている。水田や山、ため池が美しく色分けされ、見た目にもきれいである。

特別展

地図の世界展を開催

3月15日(金)～4月14日(日)

平成7年度の特別展として、「地図の世界展」を開催します。

江戸時代の可児市は、尾張藩領や幕府領、旗本領など細かく分かれ、幕末頃で53か村の村々がありました。各村では、検地のためや領主の交代、土地や用水をめぐる争いや川堰普請のためなどにさまざまな絵図がつくられてきました。

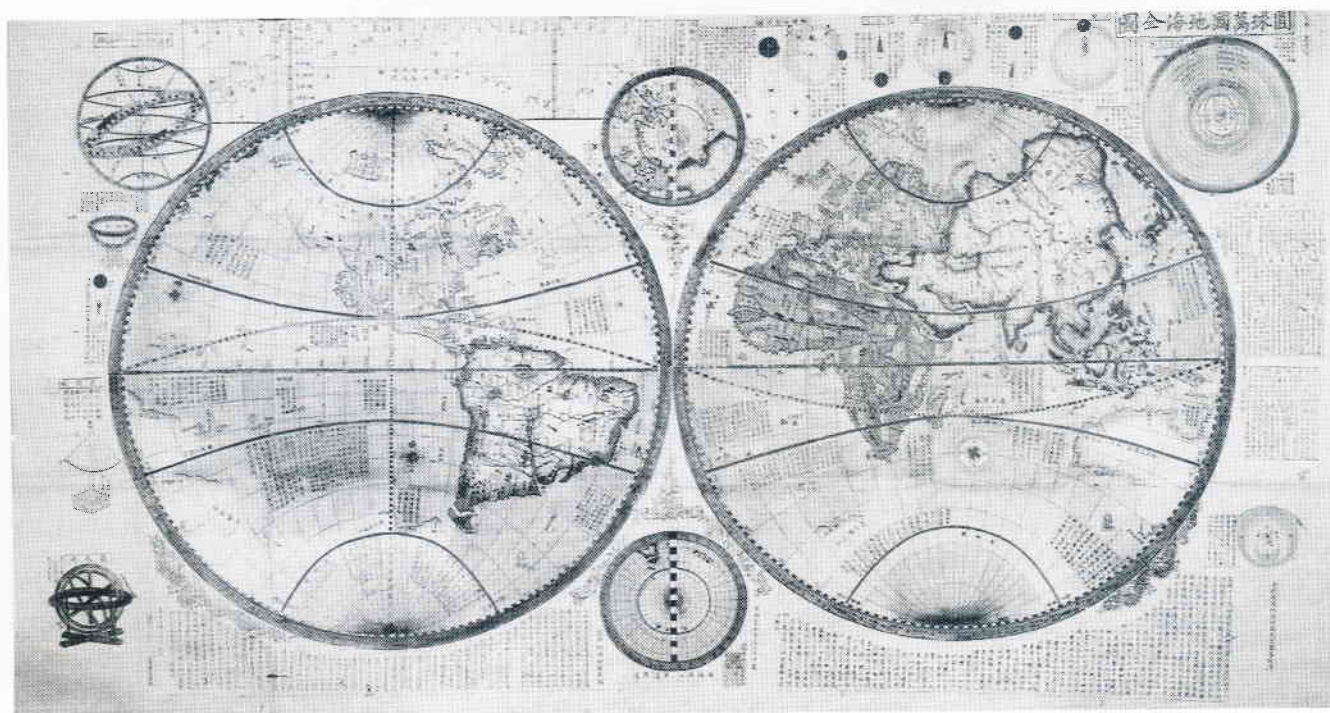
今回の「地図の世界展」では、地元につながるこうした貴重な村絵図を紹介し、はるか昔の郷土の様子を知ってもらうとともに、当時の世界地図や日本地図も併せて展示することにより、江戸時代の人々が日本や世界の姿をどのようにとらえていたのかを探ってみます。

また、このほか大正から昭和時代にかけてつくられた観光案内図、鉄道案内図などさまざまな地

図類を展示し、記載された内容から可児地域の移り変わりやその時代背景などをたどる展示もおこないます。

展示構成

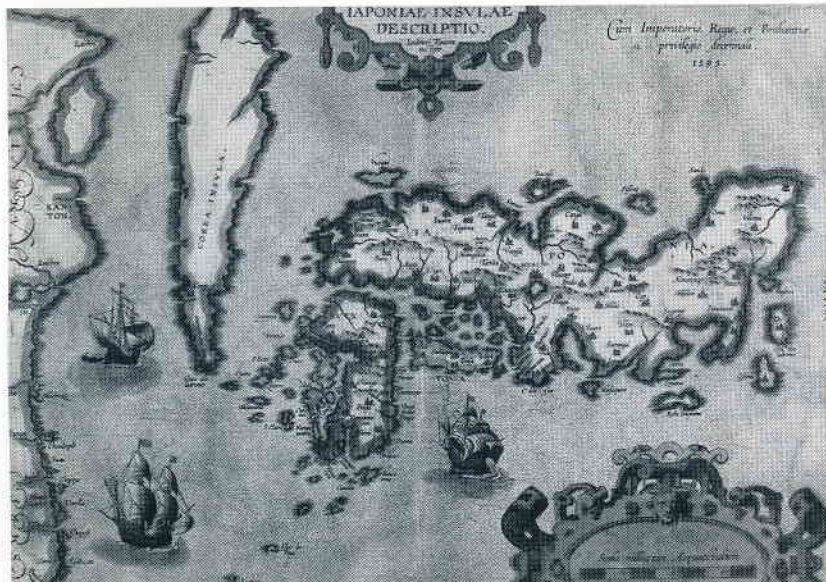
1. 江戸時代の世界地図、日本地図、美濃国図を展示し、当時の世界観、日本観を明らかにします。
2. 地元につながる江戸期の村絵図を展示し、当時の地図を知ってもらうとともに、村の様子を明らかにします。
3. 明治以降つくられたさまざまな地図(観光案内図、鉄道案内図等)を通して可児の成り立ちをみます。
4. 5万分の1の地図で、可児地域の変遷をたどってみます。



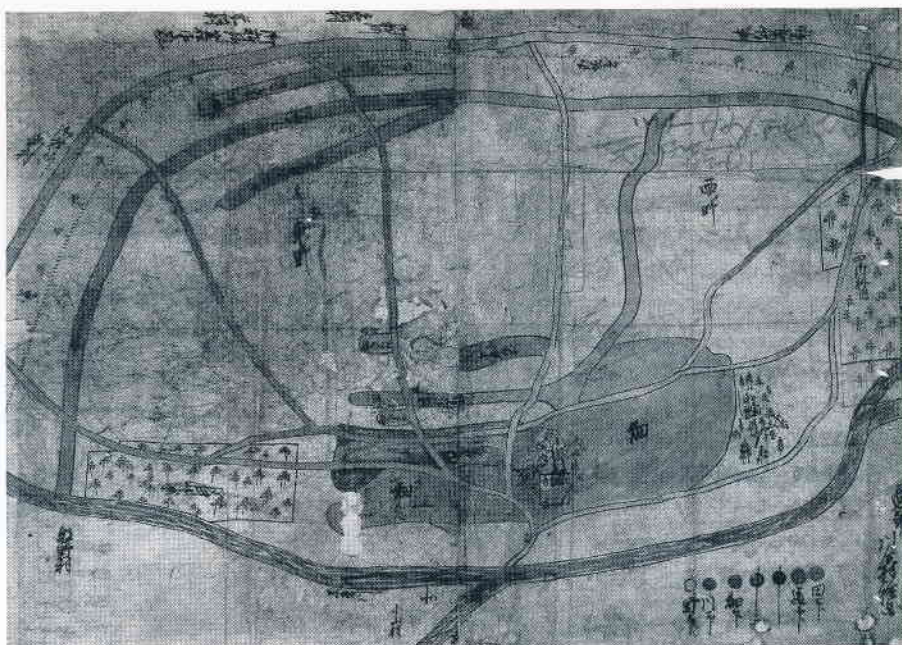
円球万国地海全図

享和2年(1802)

岐阜県歴史資料館蔵



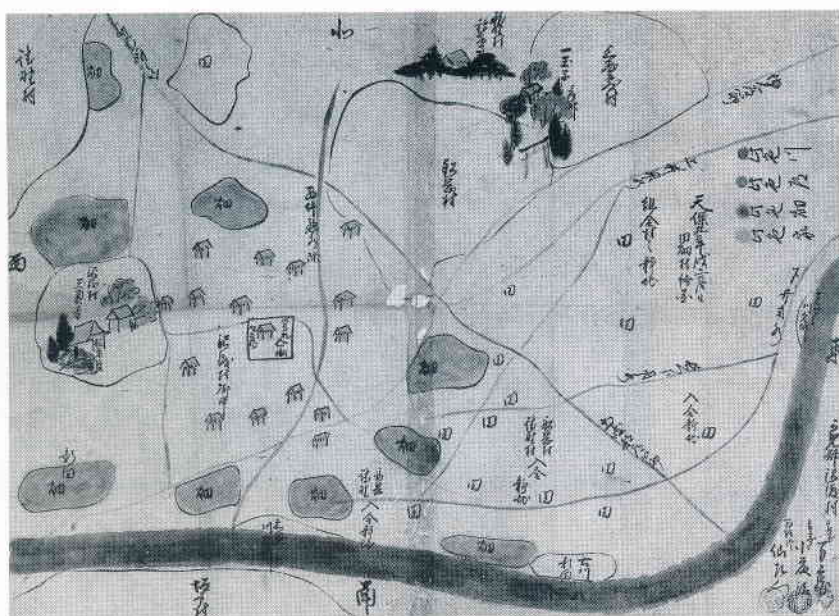
日本図 1595年
岐阜市歴史博物館蔵



川合村絵図 江戸時代

川合 渡辺 馨氏蔵

用水が十分でない川合地区では、江戸時代、段丘下の湧き水のある所に、带状に水田があったことが分かる。



沢渡村絵図 天保9年(1832)

下恵土 奥村吉孝氏蔵

下恵土の禅台寺や一王子産土(現在の熊野神社)などが記載されている。また、今はない玉奥寺の東には郷蔵や高札場があったことが分かる。

茅葺き屋根を 葺き替え



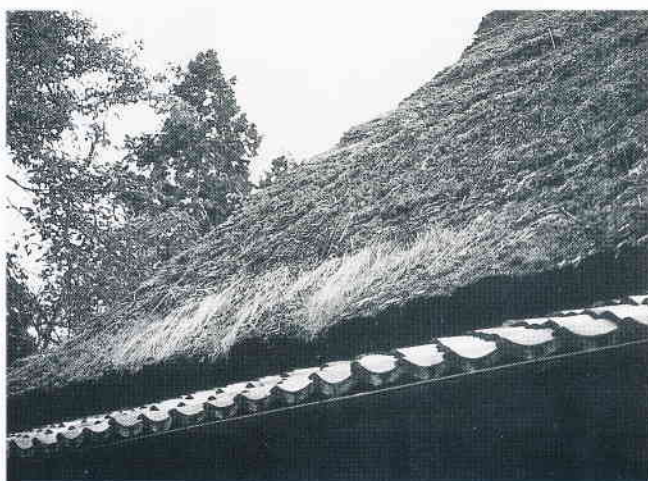
民俗資料館は、庄屋などを勤めた江戸時代後期の頭百姓の家を移築し、昭和52年8月に開館しました。

面積は138平方メートル、通称「八・八造り^{や はち}」と呼ばれる木造入母屋平屋建てで、ダイドコとオカッテは板敷き、天井も素竹を並べるだけとなっており、往年の姿を今に伝えています。

茅葺きの屋根は、これまでに昭和59年全面葺き替えをおこない、平成5年には部分補修をおこなってきました。今回の全面葺き替えは、傷みがひどくなってきたため実施したもので、昨年11月に着手、この1月に完成したものです。

葺き替えは、屋根を大きく6つの部分に分け、一か所ずつ葺き替えていったもので、北のツマから始めて、最後に棟を葺き上げました。使用した茅は、一抱えの束にして新茅600束、古茅400束の1000束を使いました。

また、屋根師は、愛知県小原村の佐々木源作さん(65歳)で、今までに飛騨の里なども手掛けています。



① 葺き替え前の民俗資料館

長年の風雨により茅葺き屋根の厚さは、当所の約1/3となり、草やコケが生えていた。



② 古茅おろし

いたんだ古い茅を取り除くと、屋根下地(骨組み)が現れる。



③ ステガヤ、アンコ葺き

軒先から棟に向かって屋根を葺く。屋根下地の上にステガヤを葺き、アンコと呼ばれる古い茅をのせて屋根の厚みをつける。アンコの上には新しい茅を葺き、ノシ（テイター）で叩いて揃える。その後、ハンボク（ほこ竹）を渡して茅をしめる。ハンボクは、縄で屋根下地と結び、足で抑えながら締めつける。



⑤ 刈り揃え

足場の竹を取り外しながら、棟から軒に向かってハサミで刈り揃えながら仕上げをおこなう。



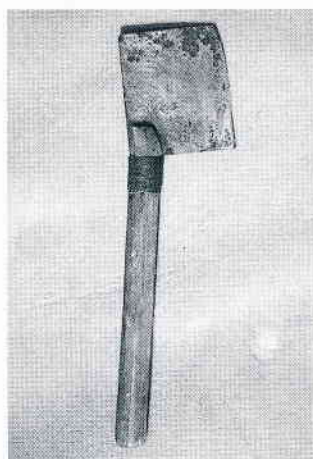
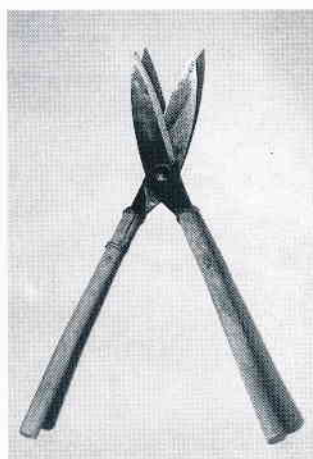
④ 棟の仕上げ

棟には杉皮を葺き、腹竹を並べて押さえる。



⑥ 茅の刈り取り

茅の刈り取りは、茎から水分が抜ける11月下旬から始める。1月末頃まで、茅場で乾燥させ、その後倉庫へ入れて保管する。刈り取った束は、背丈より高く、この長い茅を多量に使う。



屋根葺き道具（左からノシ（テイター）、ハサミ、包丁、カマ）

室原 生田勝実氏蔵

○名勝 春秋園

○天然記念物 ミカワバイケイソウ自生地

市教育委員会は、平成7年度次の2件を市指定文化財としました。
ここでは、新たに指定となった文化財の概要を紹介します。

名勝

春秋園

所在地 可児市久々利1664-1

面積 3,590 平方メートル

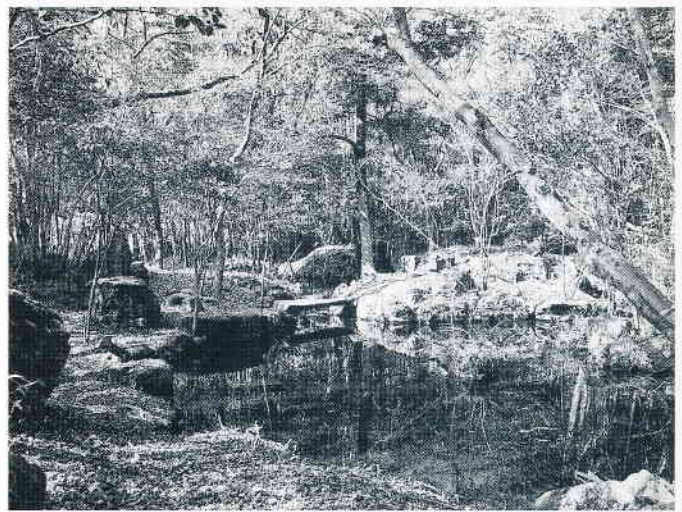
現況 山林

旗本千村氏の下屋敷の庭園として、寛永2年(1625)に造営されたもので、大規模な回遊式林泉庭園である。

千村氏は木曾義仲の系譜を引き、関ヶ原合戦の戦功により4千4百石が与えられ、久々利に屋敷を構えた。旗本であるとともに城代格として尾張藩の家臣でもあった同氏は、その後幕末に至るまで11代、300年にわたり久々利の地を離れることはなかった。

「春秋園」は、寛永2年9月23日、初代尾張藩主の徳川義直が猪狩のため久々利を訪ねた際、歓

待のために造営された下屋敷(別邸西荘)の庭園で、面積は3600平方メートル程ある。10代千村平右衛門が著した「春秋園十二境記」によれば、園内には十二の景色が設定されており、「浄瑠璃池」を中心に上段、下段の池や築山を配し、立体的にも変化に富んだ回遊式の林泉庭園となってい



平成7年12月測図

る。文化財指定の時点では雑草が生い茂り荒廃が著しかったが、庭石組は全体に良く残り、護岸の一部や築山にはすぐれた石組みがみられる。武家屋敷の庭園として来歴が明確であり、規模が大きくそしてよく保存された庭園はめずらしく、貴重な文化遺産である。

天然記念物

ミカワバイケイソウ自生地

所在地 可児市柿下578-1

面積 10,782平方メートル

現況 山林

コバイケイソウの仲間、ふつうは高山帯の日当たりの良い湿地にみられるが、このミカワバイケイソウは東濃地方と愛知県三河地方の一部の低地にのみ分布する貴重な植物である。

久々利柿下を中心とするシデコブシの自生する谷間、日当たりの悪いミズゴケなどの生える湿地に成育し、花は密集して白い小さな花を5月中頃咲かせる。花弁は6枚あって長卵形、葉は大型の楕円形で縦にひだが多数あり、長さ15~25センチメートル、幅10~20センチメートル。茎は太く頑丈で高さは70~80センチメートルにもなる。

遺存寒地性植物ともいわれ、地質時代の氷河期に繁茂したが、その後の温暖化にともなう急速な移動力もなく、局地的な微小環境の適地にはほぼそと種を守りつづける大変貴重な植物である。



開花期のミカワバイケイソウ

資料紹介1

鳥つまみ蓋付須恵器

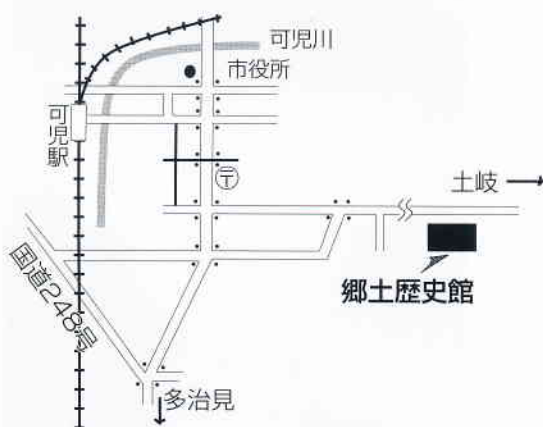
(市指定文化財)

平成3年川合の宮之脇11号墳から出土したもので、今年度復元作業をおこなった。

脚付きの親壺に四個の子壺が付くもので、それぞれの壺には、鳥の飾りのついた壺がつく。親壺の大きな鳥には、カモを模した矢羽根の模様が線刻されており、子壺の鳥は羽根を広げた姿となっている。鳥つまみ蓋付須恵器は、尾張と三河を中心に出土する独特の装飾須恵器で、本資料のように複数の鳥を採り入れ、大型かつ造形の美しいもので、六世紀初頭まで遡るものはめずらしい。



復元寸法 総高74cm



利 用 案 内

休 館 日 月曜日と祝日の翌日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入 館 料 大人300円、小人70円

可 児 郷 土 歴 史 館

可児市久々利1644-1
電話0574-64-0211